

龍膽寺雄全集

第三卷

龍膽寺雄全集 第三卷

昭和五十九年五月二十五日 発行

著者 龍膽寺雄^{りゅうたんじゆう}

神奈川県大和市中央林間二一四一五

発行者 龍膽寺雄全集刊行会

発売所 株式会社 昭和書院

東京都千代田区神田神保町二丁目三六

〈鈴木ビル〉郵便番号一〇一

電話 〇三二六四一八五九一

振替 東京七一八二二七二

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価 二、八〇〇円

©1984 Y. RYUTANJI

ISBN4-915122-48-4

目次

創作小説（昭和初期編）	7
黄燐とカクテル	7
事務所	29
島の六日間	59
コサビネ艦隊の抜錨	88
登音 ^{あしおと}	112
創作小説（戦前・戦中・戦後編）	
美人館異聞 ^{いもん}	159
創作小説（最近編）	
猫	195

エッセイ

『文明』に関する一考察……………261

随筆

富士に登る……………275

福の神、貧乏神……………277

詩編……………281

初出……………289

解説……………290

創作小説

昭和初期編

黄燐とカクテル

——網の中の鮎——

—

「だから。」

彬は口へたまって来る何かしら苦いものを呑込みながら、益々昂じる客間の騒ぎに強いて意識を閉_しらして、自分たちの気持をそこからまぎらわそうと、心とちぐはぐ

な口振りで熱心に続けた。

「……母さんの芸術について、僕はかれこれいってゐないんだ。僕は『美』を必ずしもこの頃の芸術論のように、社会の経済機構の上層的な存在だとばかりは見えないんだからね。例えば『美』そのものがしばしばある種の経済機構の基礎になることだってもある。なぜって、僕の解釈によれば、『美』は理智と同じように僕たちに与えられた別な眼でもって真理を見ることなんだからね。尤も、時とすると習慣的に、嘗て真理だったところのものにだらしなく『美』を感じることもだってあるけれど。」

僕は母さんの趣味について半分はそれを感じるけれど、しかし、その美に殉じてる母さんの芸術については、例えそのために滅びつつあるものだったにしても、敬意を贈るよ。芸術家は真実に芸術家である限り、彼の『美』を信じる以外に拠りどころはない筈なんだから。科学者が教理や、さまざまの法則や、公式を信じるようにね。

……この頃僕は時折社会主義の文学を読むけれど、その中の幾つかは、美感は在来の資本主義的な美感とちっとも変らないくせに、数学の公式のようにイデオログのへまな裏打ちをしてる。さもないければ、自分たちの貧乏趣味をプロレタリア美と早呑込みをして、肝腎な無産大衆を喜ばせるかわりに、骨董趣味に飽食した支配階級の好事癖をちよいとの間横取りしたという程度で、有頂天になっている。正直に言って、プロレタリアートの真実の輝かしい未来は、そんな貧乏乏しい趣味なんぞで満足の出来るところにありアしないんだからね。勤労階級は明日の社会の王者たるべきじゃないか！ 中世紀の専制なアジアの王さまみたいに。だから、その『美』もまた当然、……

「ちよいと！」

熱した石へ水をそそぐように、冷いやりした柔らかい翠の手が、天鵝絨の肘突の上で、彼の手首へ重なった。——灯に蔭った長い睫毛の蔭で、彼女の瞳がどこか遠い遠い空間の果てへ、じっと対象をとめたのを彼は見た。猥雑な客間の騒ぎの底には気配のように暴力のあらしが感じられた。椅子か何ぞの倒れる音、荒っぽく錯雑した床の趑音、押し潰されたような呻き声、扉の軋り、窓硝子の碎ける音——。

「行ってみなくっていい？」

彼女の指が彼を揺すぶった。

「今行ったとこで仕様がなない！」

彬は苦い口付きをした、何かしら嫌悪と反感とをまぜて。

舞台からクラブへ廻って夜更かしをして戻る晩には、きまってこの制御のない騒動がカタストロフィになるのだ。刺戟から刺戟へと靡爛しきった生活に無反省に身を持ち崩している彼女を、殉情の中に抱いて、こわれ易い玻璃だまか何ぞのように労わっている彼の心には、彼女と彼女の生活とに対する無言の肯定があった。翠が幼い時分から母のこうした生活の一面に慣れて来て、慣れた

ことからそれを自然視しているように、彼は別な解釈から何かもっと大きな、——いわば自然律の軌道の中に、臆な肯定を感じるのであった。どうかすると殆んど殉教者のようにすら気高く！

——近世の理性生活は人類のあらゆる情熱を社会生活のうちに縛めた。理性の化石がうず高く社会の表面に積まれる反面に、鬱積し鬱積した情熱は地殻の底に発散の機会をなくして、のたうち廻っている。——彼女の生活がそれを象徴しているかのように彼には感じられるのだった。人類の化石生活の底に長く閉じ込められて来た憂悶が、この女を通して赤裸にのたうち廻っているのだ。そういった風に。

「僕は。」

と、彬は悲しくいった。

「あんたの母さんだからというそれだけの理由ではなく、あのひとに、……あのひとの生活に、悲しい肯定を感じるんだ。僕たちの感情生活へ直接に投げられる色んな汚点、反感、嫌悪、憎しみ、そういったものの底に、だから正直にいつて僕はいつも熱い、何かこう、愛、……愛を感じる！ 小さな鍾が大嵩の荷物と秤の両側で均

衡するように、大きな人生や社会が一つの性格と秤の両側で均衡することがある。つまり、英雄や聖者とね。僕は世間的にやかましい非難のまことに立ってゐるあんたの母さんに、時として英雄を感じるんだ。英雄というよりか、むしろ近世的な聖者をね。縛めから神を解くように、理性の格から情熱を解こうと十字架を背負った聖者をね。だから、母さんに対する僕の感情へあんたが向ける非難は、僕の気持からはそれてる。……」

「あたくし、あんたを非難なんぞしてやしないわよ、もう。……」

翠はチュウリップを紅く浮かした粗い毛織の寝間着の中で、細いからだをくねらした。

「もう？」

彼女は羽根枕を覆うた黒い短い髪の中へ、幾らか蒼ざめた薔薇色の頬を柔らかく埋めて、長い睫毛を微った纖い指先で弄った。

「あたくし。」

といいかけて、女の子は毛織の中で柔らかく膨れたお乳を、糊の皺んだ白い敷布へ押しつけて、渦のように強く揉んで、寝間着の裾から桃色の足首を二つ揃えて出し

た。

「あたくしだって、母さまみたいになるかもわからないわよ。」

彼女は睫毛とそれを弄っていた指とを一緒に、真つすぐ俯向きに髪の中へ隠した。

「あたくし、母さまの子ですもの。……」

彬はだまって、スタンドの灯の下で寢床の翠を眺めた。額よりもっと高いところに自分の憂鬱があった。早熟な情熱を自分でもあましているこの娘も、確かに悪魔の生んだ神でなければ神の生んだ悪魔だった。絶間ない非難を彼を通して嘗て母へ向けながら、彼が彼の理性から彼女を肯定しようとしている前に、いわば匂のよう^{におい}に燃え上がる自分の情熱から、すでに母親を肯定しようとしているのだった。

——自動車のエンジンの音が軽く窓硝子をふるわしめて、乱暴に煽られた客間の扉が、パァン！と反響を線のように廊下の天井へ伝えた。

彬が腕椅子へかけたまま、スプリングの華奢な彼女の寢台の縁へ肘をもたらすと、彼女は寢台と一緒に柔らかに揺れて、髪の中からわずかに顔を仰向けた。白くく

れた頬や湿っぽい小柄な唇の辺に、スタンドの桃色の灯がスイスの山を彫ったチェッコ産の切子玻璃のまろい覆蓋を透して、緑色の森の影を塊りのように投げていた。

「しかし、」

と、彬は憂鬱にいった。

「あんたは母さんを許すように、あんた自身のそういう気持も許すかね？」

彼女は瞳に力をこめて、かぶさるようなところへ近付いて蔭った彬の顔を見た。——さっきから外へ出ていた冷たい指と、どこからか出て来たばかりの温かい湿っぽい指とが、遠慮深く彼の頬からこめがみから頸へと柔らくく匂って伸びて、頭の後で堅く両側から組まれた。

涙が彼女の睫毛の間に一杯に灯を映して光った。

「母さまのようにあたくしをするかしないか、あんた次第よ。」

涙が透明に彼女のかたかたの頬をすべった。

「……？」

裸のすべすべした腕が没義道にすくまって、香水くさい体温が桃色の毛織の襟からしぼれた。強く押付かった唇の間を、はずんだ彼女の息が寒く撫でた。

——自動車が去ってひっそりした客間の方から、誰かの呻き声が聞こえて来た。

「母さまよ！」

ちよいとだまって、不意に翠は彼の頸から腕を解いて顔をもたげた。

彬は床へ立って彼女を手で抑えた。

「あんたは寝てらっしゃい。何かと面倒になるから。……僕が行ってみる。酔ってるんだったら寢床へそつと僕が寝かして置いて上げるから。ね？……じゃおやすみ。」

二

階段をおりて、ハート形の真つ紅な扉、口敷に足をとめると、彬は暫く部屋の気配に耳を貸した。しんとした中ですすり泣きの声が聞こえた。

灯の消された客間は、光に慣れた彬の眼にはいわば闇の塊りにしか過ぎなかった。大きな傘がたの紙、覆蓋を

かぶった床立電燈が絨氈の隅に、……床へ、麗な緑色の大きな輪を描いて、思いがけない夫人の白い裸体が脂肪を透かした皮膚を燐色に光らせて、長椅子からずれた黒狐の大きな毛皮のマントと一緒に、蛇のようにのたうつていた。ヒステリックなすすり泣きの声は、ひっくり返って底の粗い麻地を見せた腕椅子の蔭に、彼女の唇から漏れていたのだ。

「どうなすったんです。」

彬は絞った綴帳をユサリと手から放して、足早に灯の輪を横切った。と、大卓子の脚の重たい黒檀の彫りのところでスリッパが床に硝子のかけらを噛んだ。

こうした現実に触れると、さすがに腹立たしさと不満とが彼のうちに頭をもたげるのだった。彼女の生活に対する智的な肯定などは、どこかへ影をひそめてしまつて、愛人のふしだらでも見るように、彼の気持へ嫌悪と反感とが高まるのだ。彼は倒れた腕椅子を乱暴に脚で押しのけて、絨氈のエジプト模様の上へみじめにほうり投げられた娼婦のような彼女の顔の化粧へ、灯を流した。むちやくちやくにもつらした髪の下で頤が涙に光って、血のように紅でくまどった唇が裸の頸に透いた筋肉と一緒に

に座敷にいた。

「うちへ帰るんだ！……」

顔をかぶせた髪を指でむしって、彼女は裸のお乳を仰に白い胸をうねらして呻いた。アルコールの匂いが不快に彼の鼻を掠めた。——酔が彼女に幻影を見せているらしかった。

「失敬な！ 帰して下さい。……ば、莫迦！」

彼女は塊りのようなものを喉へ吞込んで、自分でひどくむせた。

「母さん！」

冷たく彬が叫んだ。

もつれた髪の中から睫毛が掻出されて、硝子のかげらのような涙の底へ、意識のなげな瞳が黒くとまった。

「厭や厭や！ あたくしは厭や！ 由志さんは厭や！」

「僕です。彬です。」

彼は否定的に耳へ叫んだ。——彼女は腰を横にしようとして床へ白く腕を張って、無意識に彼の脚をつかんだ。

「あたくし、うちへ帰る。……」

「ここはうちです。」

暴力で彼の脚へしがみついてグイと腰をもたげると、下腹部を寫の葉がたに小さく覆うた燦銀絹のピカピカする布地に妙な裂けめが拡がって、皺んだ白い絹のパンティが、驚くべきことには大きく引き裂かれて、奥の素肌がチラと覗いた。

暖炉のきわに細く扉が開いて、琥珀色の灯を華奢な黒い影が遮った。——翠があとを追って階段をおりて来たのだ。彼は黒い毛皮を手早く彼女の裸の胸へくるんで、強いて不安を抑えた冷たい感情をそのまま、闇に怯えて立った女の子にいった。

「スイッチを一寸。……母さんが大分と酔ってるらしいから。」

彼女の仄白い姿が炉の辺に動くと、燦然と壁から壁へ灯がはね返った。ずれた大卓子の脚がすべすべしたモザイクの床に絨氈を蹴まして、腕椅子が二つ背中を合わして転がっていた。グラスのかげら、シャンペンの空き瓶、皺んだ手巾、踏み碎かれた蓄音器のレコード、ソファのトルコ織へ焼焦げをこしらえた葉巻の燃えさし、ゴボゴボと水をこぼしながら床を転がって、炉の青銅の火皿のところへとまった七宝の花瓶、アルコールの沫きを頭

から浴びて壁へよりかかったロダンの『考える人』、そこから散乱して踏みじられた印度蘭の花束、震動盒を空へね上げてぜんまいをほぐしほぐし、まだゆるやかに廻っているマホガニイの蓄音器函、——そういったものの中に彼女の裸は転がっていた。白金のようにキラキラ光る燦銀絹のしなやかな網を胴と脚とへもつらして、鉛錘をかたどった錘がたのピカピカする羽根枕を床へ二つ曳いて、——T・劇場の新作舞踊発表会で三日間異常な喝采を博した『網の中の鮎』の、あの裸の扮装のまゝ！

恐らくクラブで酔い倒れた彼女を、いわゆる彼女の『仲間』たちがもの好きにここまで運んで、閉会祝いのカタストロフィにもう一騒ぎ騒いで、洪水のように汎濫し去ったあとのだろう。

「母さま一人？」

チュウリップの寝間着を華奢な素足へもつらして、翠は蒼ざめた瞳をあげた。——九曜会の娘たちや研究生たちはいつものように主人に途中でまかれたのか、それとも一足先に帰されたのか。

「あの壺には水が這入ってるかしら。」

絨氈へ跪いて、緑青のように蒼い夫人の額へ手のひらをあてたまま、彬は彼女を仰いだ。——女の子は羽根枕の痕のもしやもしやとついたこめがみの辺を指で弄りながら、くるりと細い首を廻して、それから炉に近付いた。

「空っぽよ。」

壺をおろして彼女は瞳をあげた。

「じゃ、ちよいとそれへ酌んで来て下さい。……そう、そのコップのがいい、その棚の。それからタオルを絞ってね。」

小さな金のリングをサラサラとしごいて、緞帳の間から化粧室へ翠が姿を消したあとで、彬は壁へ埋めた細い硝子戸棚から芳香アンモニアの小さな化粧瓶をとって来て、床へしゃがんで、毎度のことに慣れきっているという風に、夫人の白い高い鼻へ栓口をあてた。

「厭や厭や、あんたは！……あちらへ行つて、あちらへ。……」

夫人は乱暴に裸の腕で彼を押し退けて、首を振った。
「有難う。」

化粧瓶の口を夫人の鼻に動かさずに、彼は翠を顧み

た。——段々と夫人は静かになって、無感情なすすり泣きの合間に睫毛をあげてじっと彼を見たり、うとうととまどろんだりした。

「……それからね。お寝床へ母さんを運ぶんだから、ちょいと手伝って、ね？……いつもよりちょいと酔が強いようだけれど、大したことはないでしょう。大丈夫、……じゃそっちを持って。落としちゃだめだよ。」
不安が去ると、翠は髪に蔭った白い頬に壓をつくつて、いたずらっぽく鼻から笑った。

「いいかい？」

——頭をグニャリと横に抱いて、脂肪の白く張ったまゐり肩を絨氈から引つ立てると、夫人は傾げた唇から絹糸のようにキラキラと粘液を曳いて、赤ん坊のようにがむしやらに首を振つてもがいた。

「お寝床へ行くんです。ね？ おとなしく、さ、翠ちゃん！」

艶々しい闇色の毛皮がなめらかに床へずれると、裸がむき出て、銀の網でくれた胴や腰のすべすべした皮膚が、食込んだ紐の間からパンのように白く柔らかく膨れた。

「厭やだってば、失敬な！……莫迦。」

蛇のようにうねる透明なタイツをもてあまして、翠はかかえた脚と一緒に毛皮の上へからだを崩した。と、涙っぽい彼女の眼が灯の下で、吸われるようにふと、燦銀絹の裂けた葛の葉がたの布地へ固着した。

「あら血よ！ 母さま……。」

怯えた瞳が反発するようにそこから離れて、彬を仰いだ瞬間、敏感な反省が電光のように彼女の額を掠めて、瞳に当惑の渦が廻った。そうして、だしぬけに罌粟の花のように彼女は耳まで赧くなって、眩しげな眼を彼からそらして、毛皮の裾を母親の腹へ覆うた。

「僕一人でどうにかやれる、大丈夫！」

彬は立上がつて翠を見おろした。水の濁れた壺の薔薇のように真つ赤に萎れた翠を。

「……あんたはお寝床へ行つてらっしゃい。ね？ いいから。……あとは僕が引受けた。心配をしなくてもいい。……とにかくチュウリップがそんな薄着でいて、風邪なんぞを引くといけないから。ね？ 行つておやすみ。」

——咄嗟の妙な間の悪さを、彼のこの淡白な冗談が救